

我が郷土、新潟県が生んだ二人の英才

JJ1SXA/池

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ…」は、我が郷土の英雄、元連合艦隊司令長官海軍大将・山本五十六の名言だ。

氏は新潟県長岡市(出生時は、古志郡長岡本町玉蔵院町)の出身で同じ新潟県人だから、我が郷土の…と書いたが、厳密に言うと、越後の国・長岡藩と、天領佐渡の国とは同郷では無い…こんなことを書くと何時の時代の事だとの声が聞こえそうだが、やはり佐渡ヶ島は佐渡の国であって、越後では無いのだ、「…手前生国と発しますは、越後にござんす…」では無く、「…手前生国と発しますは、佐渡の国にござんす…」です hi

話を本題に戻します、どんな人間でも、それが小さい子供だろうが、二十歳を過ぎた大人だろうが、人間は自尊心を持っています、自尊心は自分自身を肯定する気持ちであり、自分自身を尊重し、尊重されたいという思いですから、冒頭のこの言葉は、この自尊心を傷つけずに、いわゆる上から目線では無い、さりとして順序立てた、教育の基本的姿勢だ。

この後には、「苦しいこともあるだろう。言いたいこともあるだろう。不満なこともあるだろう。腹の立つこともあるだろう。泣きたいこともあるだろう。これらをじっとこらえてゆくのが、男の修行である。」、いやいや男の修行は大変なことだ！

だが、途中を飛ばして最後に、「男は天下を動かし、女はその男を動かす」という言葉がある、う〜んと唸るところだ。

山本五十六氏は、1884年(明治17年)生まれだ、その34年後の、1918年(大正7年)に、新潟県柏崎市(出生時は、刈羽郡二田村大字坂田)で田中角栄氏が生まれている。

究極の金権政治の結果として、戦後最大の疑獄事件「ロッキード事件」で逮捕され、1983年(昭和58年)10月12日には懲役4年、追徴金5億円の有罪判決が下ったが、「判決は極めて遺憾。生ある限り国会議員として職務を遂行する」と発言し控訴したが、1987年(昭和62年)7月29日に控訴棄却、上告審の最中の1993年(平成5年)12月16日の田中の死により公訴棄却(審理の打ち切り)となった。

田中の首相在任中の昭和48年、若手政治家の政策集団「青嵐会」を立ち上げ、「金権政治」を批判した石原慎太郎・元東京都知事は、後日、田中角栄について「角さんは非常に義理人情に厚いリーダー像の象徴で、エリート官僚もとりこにしてきた。日本全体を機能的な都市にし、合理的に道路や空港を使用できるようになったのは角さんのおかげです。私たちはその中に今、生きているわけです。各県に地方空港を造り、日本中に高速道路を造り、新幹線が走り、リニアが走るという、国土を非常に使いやすく便利にした。人口問題は日本の国力だから、歯止めはなかなか難しい。角さんだったら人口を増やすために奇想天外な面白い手を打ったんじゃないか。しかもそれを推進するレトリックをあの人だったら持っていると思う、だって、『日本列島改造論』って誰も思いもつかなかったものでしょう。」と述べている。

立花隆氏の著書「田中角栄研究・其の金脈と人脈」の出版以降には、角栄＝金権政治の論ばかりが目立つが、金だけで人の心が掴めるか？

角栄は、「金を渡すから、俺の言うことを聞けという奴に素直に従うか?」、「人にカネを渡すときは頭を下げて渡せ」、「貸した金は忘れろ」との名言を吐いている。